

難しくないアニマルウェルフェアの取組み ―宮崎大学附属牧場の事例―

畜産経営の持続可能性を確保するために農場内に潜むリスクを管理する手法である GAP (Good Agricultural Practice: 農業生産工程管理) の普及が重要となっている。一方で、国際的な信頼性の確保に向けてアニマルウェルフェア (AW: 動物福祉) への配慮も重要であると考えられている。しかし、我が国においては、従来の畜産の考え方と AW の取り組みには、乖離があるように捉えられ、生産者によっては、積極的に AW に取り組みにくい印象をもっている。そこで、本公演では、わが国畜産業界で初めて GAP 認証を取得した宮崎大学附属住吉フィールド (牧場) にて実践している「難しくない AW」の取り組みを紹介し、生産現場での実践に役立てていただきたいと考えている。

住吉フィールドは、教職員 18 名 (非常勤職員、事務職員含む) で乳牛、肉牛、豚の一貫生産と粗飼料の栽培を行っている。採草地及び放牧地を含めた敷地面積は 50ha であり、畜舎は、8 棟 (牛舎 6 棟、豚舎 2 棟) ある。施設使用者は、本学学生だけでなく、他大学の学生や社会人の研修等の受け入れを行っており、年間延べ 3,000 人を超える来場者がある。

GAP とは、生産現場における食品安全、労働安全、環境保全、家畜衛生、アニマルウェルフェアに関するリスクを洗い出し、これらが事故につながらないように管理する取り組みである。住吉フィールドにおいては、2014 年にドイツに拠点がある GLOBALG.A.P. 認証を我が国畜産業界で初めて取得した。その後、2020 年には JGAP 畜産認証を取得している。GLOBALG.A.P. (以降、GGAP という) および JGAP とともに農場が実施すべき事項が定められており、この中には AW に対する事項も含まれている。両 GAP で求められている AW の取り組みは、いずれも国際獣疫事務局 (WOAH) の基準に則したものとなっており、JGAP においては、農林水産省が策定した畜種ごとの「アニマルウェルフェアに対応した家畜の飼養管理指針」の内容を理解し、自農場の取り組みの見直しを実施することを求めている。

住吉フィールドでは、2013 年より GGAP の要求事項を参考に少しずつ、AW の取り組みを進めた。実施時期や方法の見直しを行ったものとしては、除角や去勢があった。以前は、学生実習に合わせ、牛の月齢は特に考慮していなかったが、GGAP に取り組み始めて以降、早期に実施したり、局所麻酔を使用したり、している。一部の取り組みについては、実施時期や方法を見直したが、初乳を飲ませるタイミングや牛舎の清掃の頻度、十分な量の給餌など、多くの項目は、すでに取り組んでいることであり、飼養管理そのものやその延長線上にある取り組みである。

つまり、AW への配慮は決して特別なことではなく、日々の丁寧な飼養管理の積み重ねそのものである。本講演では、住吉フィールドでの試行錯誤と具体的な実践例を交えながら、明日から現場で取り組める「難しくない AW」の視点と、GAP を活用した持続可能な農場管理のあり方について提示したい。